

小倉文庫拾遺

福 井 玲

筆者は、以前、小倉進平（1882-1944）の旧蔵書を集めた小倉文庫のうちで、朝鮮本を主体とし文学部漢籍コーナーに所蔵されている本の目録を作成し、本誌第9号と第10号に発表した¹。その縁もあってか、2018年に、小倉進平の旧蔵本のうちで、ご令息小倉芳彦先生が当時なおご自宅に残されていた若干の書籍および資料を韓国朝鮮文化研究室に譲り受けることになった²。それらの整理は折からのコロナ禍で遅々として進まなかったが、ここにその目録と注目すべき資料についての若干の解説を付して小倉文庫拾遺として紹介する次第である。

また、それとは別にその翌年、小倉芳彦先生より小倉進平の卒業論文が見つかったとの連絡を受け、これも研究室で引き取ることとなった。本稿では、この卒業論文もこれらの寄贈書一覧に含めることにする。なお、各書目の頭に括弧に入れて通し番号を付する。

1 卒業論文

(1) 平安朝末期に至る國語の音韻変遷

表紙（右下）文學科言語学／小倉進平

（左上）平安朝末期に至る國語の音韻変遷（題箋に墨書）

内表紙 表 文學科／小倉進平（名刺大のカードを貼付）

最終丁 裏（左下）文學科／小倉進平

（左上）明治三十九年四月

装丁 線装（4針）、袋綴じ、表紙は黄土色の格子状の縞柄

大きさ 縦 25cm 横 17cm

緒言5枚、凡例2枚、目次2枚、本編138枚、総147枚

和紙に墨書 半葉12行 1行30字前後

これは1906年に小倉進平が東京帝国大学に提出した卒業論文である。内容は上代から平安時代までの日本語の音韻史であり、『日本霊異記』、『新撰字鏡』、『万葉集』、『和名類聚抄』、『祝詞・宣命』、『類聚名義抄』といった資料を主に扱いながら、母音体系、個々の子音の音価など多くのテーマについて、江戸時代の多くの国学者の説や、欧米の学者の説を検討しつつ、当時の発音の実体とその変化を論じたものである。詳細は福井玲（2021）に記述したのでそちらを参照されたい。

¹ 福井玲（2002, 2007, 2011）。最後のものは、前二者を統合し、韓国語に翻訳したものである。

² 貴重な書籍を寄贈して下さい、さまざまなご教示をいただいた小倉芳彦先生に感謝いたします。また、先生宅を訪問する際には辻大和氏に案内をしていただき、2018年4月12日の資料受け渡しに際しても同氏のご助力を得たことを感謝します。なお、これらの本は東京大学図書として登録する予定である。

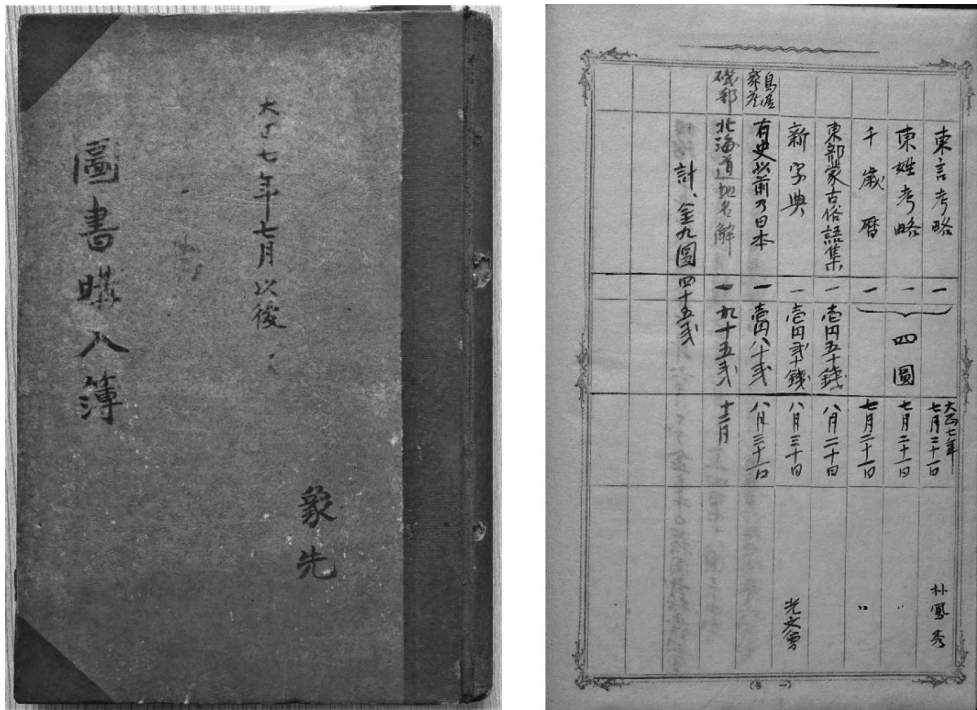


図1 図書購入簿(1) (左)表紙, (右)最初の記録

2 記録

(2) 図書購入簿

表紙 「圖書購入簿 大正七年七月以後 象先」

袋綴じの罫線入り用紙を綴じた帳面に96張分, 墨書またはペン書きで記入

これは小倉進平が購入したか寄贈を受けた図書を記録した帳簿である。表紙に「大正七年七月以降」と書かれ, 実際, 最初の記録は大正7年7月21日から始まり, 最後は昭和18年12月22日で終わっている。これは小倉進平が亡くなる前年である。ただし, 昭和18年5月以降の部分は, 小倉進平の記載方式に倣って小倉芳彦先生が追加で記入された部分が含まれる。また, この帳簿の中には書店からの領収書等が4枚挿入されている。

また, この帳簿の冒頭には「明治三十九年以後大正七年六月マデ金壱千〇七拾圓貳拾五錢五厘」などと記されており, 大正7年以前の分の記録も存在したのかもしれない。

各項目は一行内に, 著者名, 書名, 冊数, 金額, 日付, 入手先および注記が記されている。金額に関しては, 前半部分では購入した本について記され, 当然ながら, 寄贈された本には付けられていない。しかし, 奇妙なことに, 途中から寄贈された本にも金額が記載されるようになる。これは一種の財産目録のような意味合いがあるのかもしれないが, 正確な理由は不明である。

さて, この帳簿は小倉進平がどのようにして図書を収集したかを示す貴重な資料となる。一般的な書籍の入手先としては, 丸善, 南陽堂, 一誠堂, 文光堂といった書店名が記され, 寄贈

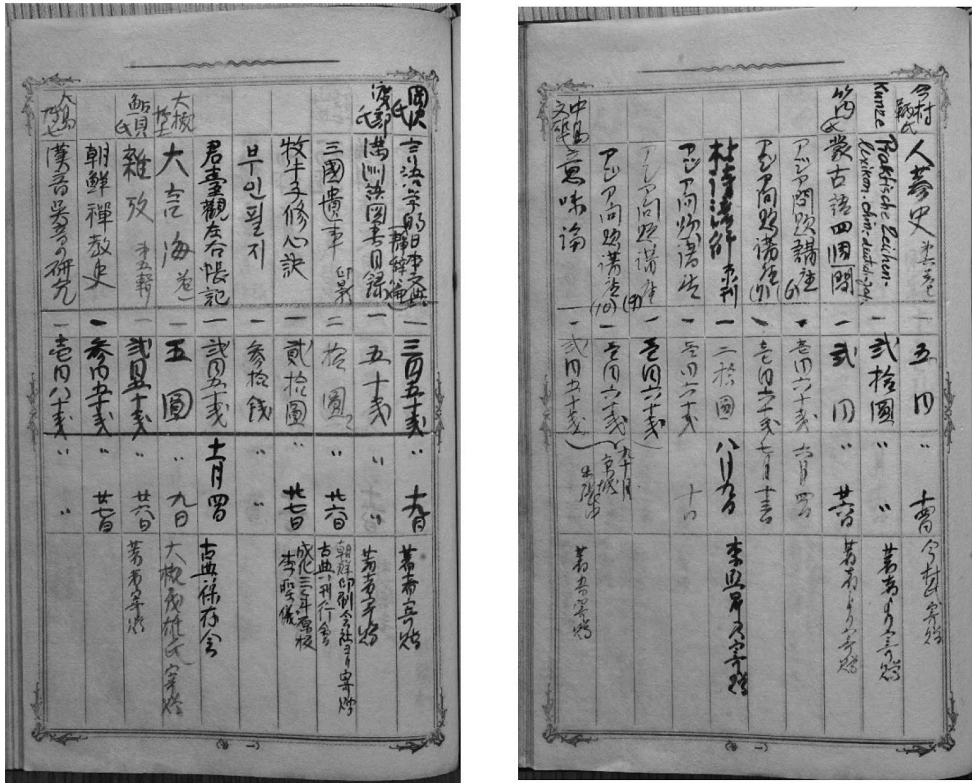


図2 図書購入簿 (2) (左)「牧牛子修心訣」の記録, (右)「杜詩諺解 原刊」の記録

書の場合は寄贈者名が記されているが、朝鮮本に関しては、入手先として「朴鳳秀、金聲律、李聖儀、朴駿和」という4人の個人名がしばしば記されている。彼らは、当時、朝鮮の古書の売買に従事した人物たちであると考えられる。

実際、このうち李聖儀氏については、この帳簿に挿入された(昭和9年)7月19日付の明細書1葉が残されており、そこには6冊の本の明細と挨拶文が書かれている。その一部には「……朝鮮諺文書籍三四類を今日郵便にて御送附致し候条御査取御高覧の上御入用なれば御下命被下度……」等とあり、一種の見計り本であったことが分かる。この6冊のうち5冊は実際に昭和9年7月28日に「京城李聖儀」氏から購入したとこの帳簿に記されている。

こうした京城での古書の商いに関して、黒田亮(1940)『朝鮮旧書考』は「さうした朝鮮古書に関する敏活な取引は、古書店を介さないで、如何なる機関によって行はれるかと云ふに、それは、古書専門の仲介業者の手を経由するのであるが、……(中略)……云はば移動古書肆、或はもっと適切に表現すれば持売古本屋とも名づくべきであらう。京城大学に出入する朝鮮古書商は、殆ど全部この種の持売古本屋で、大きな風呂敷包を抱いて、大学構内に殆ど毎日のやうに姿を見せてゐる」(p. 2)という記述がみられるが、おそらく彼らもそうした人々だったのであろう。

さて、最後に、この帳簿から分かる小倉文庫の中の貴重書の入手経路に関して2つの事例を紹介する。最初の例は世祖代に刊経都監から刊行された『牧牛子修心訣』(1467年刊)である。これは図2の左側の写真に見られるように、昭和7年10月27日に前述の李聖儀氏から購入したものであることが分かる。註釈として「成化三年原板」と書かれ、金額も二十円と高価であり、

小倉進平がこの資料の価値を高く評価していたことが分かる。「成化三年原板」と記されているのは、15世紀の諺解書の中には後世の復刻本が少なくないのに対して、これは実際に成化三年（1467）に刊行された原刊本であること注記したものである。次に、『杜詩諺解』初刊本（1481年刊）の記録を図2の右側に示す。小倉文庫には乙亥字本の巻17が所蔵されているが、その由来はこれから明らかにできる。すなわち、昭和14年8月9日に「杜詩諺解 原刊」と記され、「李熙昇君寄贈」と注記されており、李熙昇氏からの寄贈本であることが確認できる。筆者はかねてよりこの『杜詩諺解』巻17が同氏から寄贈されたものではないかと推測していたが³、この記録によってこの推測が正しかったことが判明した。

3 刊本・写本

3.1 朝鮮語学

- (3) *Dictionnaire Coréen-Français* (韓佛字典), Missionnaires de Corée de la Société des Missions Étrangères de Paris, 1880. Yokohama: C Lévy, Imprimeur-libraire.
- (4) *Grammaire Coréenne*, Missionnaires de Corée de la Société des Missions Étrangères de Paris, 1881. Yokohama: Imprimerie de L. Lévy et S. Salabelle.

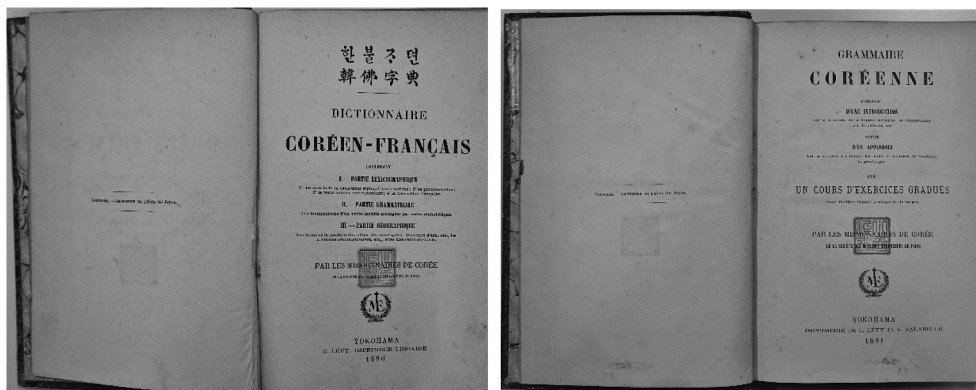


図3 左：Dictionnaire Coréen-Français (韓佛字典) 右：Grammaire Coréenne

この2点は、19世紀末にフランスの宣教師たちによって編纂された辞書および文法書である。開化期の西洋人による最初期の韓国語の辞書および文法書として非常に重要なものである。著者は、表紙にはパリ外国宣教会の韓国宣教師によるとのみ記されているが、Félix-Clair Ridet (1830~1884) と信徒の崔智嫻が主導的な役割を果たしたと言われている。

3.2 朝鮮本

- (5) 増補文献備考 250巻49冊、巻首1冊、正誤1冊（計51冊） 隆熙2年（1908）
- (6) 世界万国年契 学部編輯局新撰

³ 福井玲 (2011: 244)。李熙昇氏は、京城帝国大学朝鮮語科で小倉進平の指導を受けた学生であり、小倉文庫にはこの他にも同氏からの寄贈書が存在し、この帳簿にも記載されているものがある。ちなみに李熙昇氏は、この寄付の翌年の1940年に東京帝国大学の大学院に入学しており、この杜詩諺解の寄贈もそれと関係があるのかもしれない。

- (7) 校刊安心寺本達摩大師観心論・校刊大乘開心顯性頓悟真宗論 金九經 甲戌7月(1934)
- (8) 校刊歴代法寶記 全 2巻1冊 乙亥 金九經
- (9) 茶飯更嚼 薛泰熙著 昭和14年 京城
- (10) 東史年表 魚允迪 大正4年 京城 宝文館

(5)の『増補文献備考』は、小倉進平(1920/1964)『朝鮮語学史』にしばしば引用されているもので、彼が参照あるいは注目した箇所には付箋が施されたり、朱点が加えられたりしている。

3.3 日本語日本文学

- (11) 日本古代文字考 落合真澄著 2巻 明治21年7月
- (12) 鏝木文字考 一名神代文字点画考 全 鶴峯季尼著
- (13) 改訂韻鏡 大島正健著 啓成社 明治45年 三省堂
- (14) 漢呉音図 上 太田全齋【文化12年(1815)】序 上田万年・服部宇之吉(大正3年)
- (15) 漢呉音徴 中 太田全齋
- (16) 漢呉音図説 下 太田全齋
- (17) 音徴不尽 全 太田全齋【文政癸未(1823)】
- (18) 同音窠図 全 太田全齋
- (19) 音図口義 全/全齋読例 全 太田全齋 付：家系・年譜・著書(浜野知三郎)
- (20) 土佐日記燈 富士谷御杖 上中下3冊 明治31年 東京：国光社【文化13年(1816)】
- (21) 古事記上巻 春瑜本影印 橋本進吉解説 昭和5年【応永33年(1426)春瑜書写】
- (22) 古事記 真福寺本影印 上中下3冊 山田孝雄解説 大正14年【応安3年(1370)賢瑜書写】
- (23) 正訂 古訓古事記 上中下3冊 明治4年4刻(寛政11年) 京師書肆 永田調兵衛
- (24) 文鏡秘府論 地1冊 徳富蘇峰所蔵本影印 山田孝雄解説 昭和10年【古典保存会】
- (25) 節用文字 1冊 徳富蘇峰所蔵本影印 山田孝雄解説 昭和7年【古典保存会、節用集には非ず、色葉字類抄の一異本】
- (26) 伊勢物語 1冊 守屋孝藏氏蔵古鈔本伊勢門語 橋本進吉解説 昭和4年【鎌倉時代中期以前写本】
- (27) 参訂保元物語註釈 全 内藤耻叟・平井頼吉著 明治40年第7版(明治33年初版) 東京：青山清吉蔵版
- (28) 倭名類聚抄 1冊 真福寺本影印 山田孝雄解説 大正15年【古典保存会】
- (29) 寶生院蔵倭名類聚抄紙背文書 1冊 影印 大正15年?【古典保存会】
- (30) 四体千字文 相澤茂 昭和15年第15版 東京：辰文館

(1)で紹介した卒業論文からも分かるように、小倉進平は1911年に朝鮮に渡る前は日本語音韻史研究に志していた。この中には、彼が朝鮮語学に転じた後に入手したものも含まれており、彼がその後も日本語研究に関心を持ち続けていたことを示す。なお、上で【 】に入れた注記は筆者が補ったものである。以下も同様。

3.4 漢文学

- (31) 唐詩選国字解 李攀龍編選 南郭先生辯 木版本 7巻4冊 寛政3年(1791)再板(天明2年開板) 江戸:小林新兵衛梓(嵩山房梓)

3.5 語学

- (32) 独逸前置詞使用法 杉谷泰山 明治34年 東京:博文館
(33) 高等独逸文典 関口存男編 (昭和15年初版)昭和17年第3版 東京:三省堂
(34) 現代仏蘭西語に於ける冠詞の用法 松原秀治著 昭和18年 東京:白水社
(35) 標準支那語教本 鈴木擇郎編 (昭和9年初版)昭和15年第12版 上海:東亜同文書院支那研究部

3.6 歴史学

3.6.1 朝鮮史

- (36) 朝鮮史料集真 上下2帙 昭和10年 朝鮮史編修会編 朝鮮総督府
(37) 朝鮮史料集真続 1帙 昭和12年 朝鮮史編修会編 朝鮮総督府
(38) 大東金石書 景今西龍氏蔵本 京城帝国大学法文学部 昭和7年
(39) 朝鮮史料叢刊第19 宗家朝鮮陣文書 1軸(箱入) 解説添付 昭和12年 朝鮮総督府
【秀吉朱印状24通の影印】
(40) 朝鮮史料叢刊第20 正徳朝鮮信使登城行列図 1軸(箱入) 解説添付 昭和13年 朝鮮総督府
【正徳元年(1711)の朝鮮信使】
(41) 朝鮮歴代実録一覧 末松保和編 昭和16年 京城帝国大学付属図書館

3.6.2 日本史

- (42) 南淵書3巻 大正11年 藤原(一条)實輝 【小田省吾「南淵書ニ就テ」なる油印3葉含む】
(43) 校補上宮聖徳法王帝説證註1冊 狩谷望之證註 平子尚著 大正2年 丙午出版社
(44) 法王帝説證註 狩谷望之證註 明治43年 裳華房
(45) 三河物語 文科大学史誌叢書 上中下3冊 明治31年 東京:富山房

3.7 漢籍

- (46) 都市叢談 逆度過客編集 中華民國29年(1940) 北京
(47) 方輿紀要簡覽 34巻16冊(2帙) 顧祖禹撰 潘鐸輯録 紅杏書屋 咸豊8(1858)
(48) 書目答問 4冊 光緒4年(1878) 上海淞隱閣
(49) 曾文正公詩文集 4冊 上海○○樓景印
(50) 許學考 26巻16冊 黎經誥 中華民國16年(1927)
(51) 原儒 上下2冊 熊十力 1956年 上海:龍門連合書局

3.8 その他

- (52) 環海異聞 5冊 写本 【大概玄沢著 文化4(1807)年】

これは仙台藩の船員が1793年に石巻から江戸に向かう途中で嵐にあってアリューシャン列島に漂着し、その後ロシア各地を巡ってから1804年に帰国するまでの漂流記で、陸奥国一関藩出

身の蘭学者であった大槻玄沢（1575～1827）が漂流民への聞き取りを行って記録したものである。彩色画を含む精写本であるが、書写が誰の手になるものかは不明である。また小倉進平がこれを所持していた理由としては、彼の故郷仙台とのつながりが考えられるが、これも詳細は不明である。大槻玄沢が仙台藩の依頼を受けたという作成経緯のほかに、小倉進平が仙台で玄沢の孫で『言海』の著者として有名な大槻文彦の教えを受けていたことと関わるのかもしれない。本来、15巻であったとされるが、この写本は5冊から成り、第5冊の題簽には「大尾 五」と記されている。



図4 環海異聞（左上：巻1表紙，右上：巻1冒頭，下は彩色画の例）

- (53) 釋棕 1冊 稲葉岩吉 昭和11年 京城：宝大阪屋号書店
- (54) 巴彥塔拉盟史資料修正 土默特特別旗之部 第1輯 江実編 成紀737年 蒙古連合自治政府巴彥塔拉盟公署
- (55) 原語による臺灣高砂族傳説集 上山満之進 台北帝国大学言語学研究室 1935年 東京：刀江書院

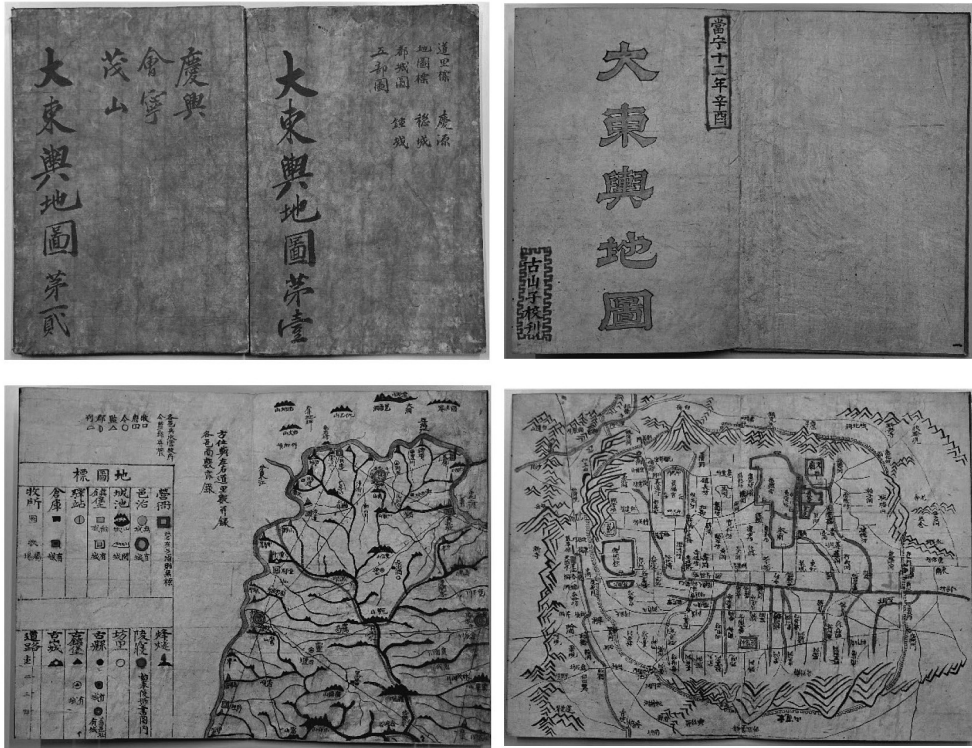


図5 大東輿地図（左上：巻1, 2の表紙, 右上：内題, 左下：咸鏡道北部, 右下：都城図）

4 地図

(56) 大東輿地図 古山子 金正浩 写本 22帖（箱入）

『大東輿地図』は朝鮮で1861年に金正浩（1804-1866）によって木版で刊行された地図で、1864年に再刊されている。これはその写本と思われる。ただし、版本には最初に序文などが記されているが、これにはそうした文章は見られず、地図のみが写されている。22帖すべて揃っている。いつ誰の手によって写されたものかは不明である。紙質などから見て、それほど新しいものではなく、19世紀後半、版本の刊行からほどなくして写されたもののように思われる。

(57) 耽羅地図並序 写真6葉 耽羅地図序 油印本1冊（昭和9年 四方・内藤）

(58) 最新支那分省図 1冊 西山栄久編 大正3年 東京：大倉書店

(59) 欧州古版 日本地図集 松本賢一編著 昭和18年 十一組出版部

(60) *Historischer Schul-Atlas*. 1923. F. W. Putzger. Bielefeld und Leipzig: Verlag von Velhagen & Klasing.

(61) *Philips' Record Atlas*. 1923. George Philip. George Philip & Son, Ltd.

(62) 東宮御成婚記念 大日本交通全図・日本交通分県地図 大正11年～昭和5年 大阪毎日新聞（全図1, 東北5, 関東3, 中部5, 北陸2, 近畿3, 四国4, 中国5, 九州琉球6）

(63) 模範新大東京全図（破損）

(64) 新大東京全図 昭和7年 東京：文彰堂書店（破損）

- (65) 精緻大東京市全図 昭和14年 (破損)
(66) 町界番地入 新大仙台地図 昭和18年 木村文助 (破損)

(60) と (61) は小倉進平が1924年8月から1926年4月までヨーロッパに留学した際のものであろう。下の (71) と (72) も同様である。

5 雑誌

- (67) 青丘学叢 3冊 (第1冊1～6号, 第2冊7～12号, 第3冊13～18号) 昭和5年8月～昭和9年11月 青丘学会 中村栄孝
(68) 音声学協会会報 1冊 (第1号～25号) 大正15年～昭和7年 音声学協会

6 抜刷

- (69) 亀田次郎 山片蟠桃翁の事跡補遺 国学院雑誌29巻8号

7 その他

- (70) 全国旅行案内地図 附・満州国 (婦人倶楽部付録)
(71) *Guide Book to Windsor Castle and the Town and Neighbourhood of Windsor. 1924 edition.*
(72) *Staatstheater Opernhaus Berlin unter den Linden. 1925.*

参考文献

- 小倉進平 (1920) 『朝鮮語学史』 京城：大阪屋号書店。(増訂補注版 (1964) 東京：刀江書院.)
黒田亮 (1940) 『朝鮮旧書考』 東京：岩波書店。
福井玲 (2002) 小倉文庫目録 其一 新登録本. 『朝鮮文化研究』 9 : 124-182 ([1]-[59]). 東京大学大学院人文社会系社会研究科 朝鮮文化研究室。
福井玲 (2007) 小倉文庫目録 其二 旧登録本. 『韓国朝鮮文化研究』 10 : 105-130 ([1]-[26]). 東京大学大学院人文社会系社会研究科 韓国朝鮮文化研究室。
福井玲 (2011) 小倉文庫の特徴について. 『奎章閣』 39 : 241-376. ソウル大学校奎章閣韓国学研究院。(目録を含む。原文, 韓国語)
福井玲 (2021) 再発見された小倉進平の卒業論文について. 『朝鮮学報』 257 : 1-33. 朝鮮学会。

Addendum to the Ogura Collection

FUKUI Rei

This is a list of books and documents originally owned by Ogura Shimpei (1882–1944) and recently donated to the Department of Korean studies, University of Tokyo, by his son professor Ogura Yoshihiko. A few accounts are given on important items.

Ogura Shimpei was famous for his studies in Korean linguistics and also for his collection of books on Korean linguistics. Most of his books were donated to the University of Tokyo soon after his death in 1944 and have been known as the Ogura collection (Ogura bunko). However, there are some remaining books and documents which were not donated at the time, and some of them were newly donated to our department in 2018. Among these books and documents, the following items are of importance (numbers in parentheses indicate the serial number in this list) : (1) Ogura Shimpei's graduation thesis submitted to the Imperial University of Tokyo in 1906, (2) Ogura Shimpei's record of books he purchased or donated, (3, 4) Dictionnaire Coréen-Français and Grammaire Coréenne, published by the French missionaries to Korea in the late 19th century, (52) Kankai Ibun, a record of sailors from Sendai who shipwrecked in 1793 and brought to Russia and stayed there for about 10 years before returned to Japan in 1804, (56) a manuscript of the map of Korea originally published in the mid 19th century in Korea.